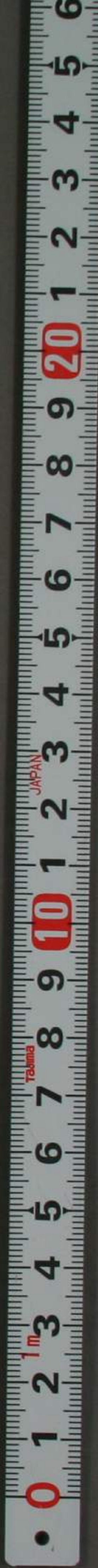




南總里見八犬傳第九集五

1曾4
600
283



民等も知らずけん。その後ふゆえけり。話分両頭。その日洲崎の陣中。荒磯南
弥六が身後の螟蛉見る。磯崎増松の其實父董野の阿弥七と椿村の隊六
と共侶の烽火臺の加役を充られて件の吉室下在りける。遙小眺且に洲崎の澳の
水戦へ自家十二分の大勝利を焼盡さる。寄隊千百の戦艦の燬を免るるゆ
稀ゆく。猛火と做りて。波上の煽々る光景の冠成る。筑石の海を。不知火中似
たべ。敵の衆兵身を焦して。烟裏の叫ぶ聲の焦熱地獄の罪人の呵責もかく
て。あつげれと思へ。毛骨竦然と人皆駭く。中増松の総角をれも。性とて
武勇と好め。自家の士卒の勝不乘る。拵を呈次と親と隊士八の叫く。我
烽火の加役とて。その処にれども。自家既戦以て。敵又寄去るも。あつげれば。烽火
火を颺ぐ。急を報ると。あつげるも。あつげれば。船を乗り出して。焼残るる敵は
船を流さ。命も留む。且水溺れて。命を殞る。敵の亡骸と合揚る。開が

中。那那衆隊。大將品も。ささげ。然るに。仁慈を旨と。あつげ。館へ。致し。忠信を
と。空く。て。這臺下。在らん。優るべし。の。議を。思ひ。あつげ。と。言。老。実。達
談。と。何。弥。七。急。小。推。禁。め。その。亦。要。る。拵。入。汝。の。尚。総。角。を。れ。館。の。憐。し。思
食。て。の。の。加。役。を。做。され。友。と。御。軍。令。違。ひ。る。後。の。御。外。と。争。何。せん。無。用。を。と
と。空。君。れ。隊。六。も。亦。六。の。意。と。好。と。て。俱。不。の。字。と。の。の。従。ふ。べ。も。あ。つ。げ。れ。増。松。と
い。い。ふ。と。思。ふ。の。の。争。ひ。難。て。黙。然。と。て。在。り。ける。程。敵。の。衆。艦。の。燬。盡。され。と
閉。戦。克。つ。自家。の。勇士。の。敵。の。殘。兵。雜。舩。を。乘。り。て。命。を。涯。ら。逃。去。る。猶。脱
さ。す。快。船。と。漕。走。ら。せ。て。趕。ふ。程。洲。崎。の。澳。を。兵。孫。火。絶。て。敵。の。棄。棄。し。巨
艦。の。残。の。過。半。焦。る。あり。或。の。舟。底。の。殘。る。も。あ。つ。げ。波。濤。の。揺。動。々。漂。ふ。増。松
遙。小。眺。望。今。那。艦。を。令。さ。す。も。あ。つ。げ。孰。の。時。を。あ。つ。げ。と。思。へ。心。焦。燥。て。連。り。の。嘆
息。を。折。り。天津。九。西。郎。員。明。の。戰。飯。餽。の。所。役。果。て。聊。暇。と。り。り。と。あ

日の水戦を見ま欲さ伴をも俱せ劍太刀身の身甲の針脛衣を這
 頭の浦邊より出さ舊家老隸の老僕詰茂佳福と相俱料を小舟
 ける増松等三人との前日洲崎の陣營を義成主見参の折送小回茂認
 更増松の致びてのま口誼も果ざる件の意衷を徳々と告て好夕を請
 問へ九三四郎駭嘆して噫和郎の年尚十五の足らぬ里の然角をける忠
 勤を思ひ起せし恐れ南弥六の靈憑をいさるぞあらざん我も亦尪弱多病
 る主君の與小館今番の從軍を許さぬを是戦飯司の蛭見所ゆを
 ありけんと本意るとの思ひ今日偶暇ありて和郎と共侶那海上小焼
 残り敵の艦を令集て那亡骸をも曳揚て然ども這情願先餘
 請まると御免許を稟るあわづ軍令と破るふ似らるとのいつ後方とら
 へと詰茂和老の昨日堀内叟の從者御陣小参り在るを幸ひこれ

情由目今听れ如い増松と咱等が與堀内王の義を告て館の御
 免許を請ひぬねをたてて馮むとと佳福の異議もするをあらる
 小館御許容るる小可走りと又來て來る障りると思て去向をた
 めひと父急増松と阿弥七と隊八等小楫をま君が在陣野を投て
 走りけり介程天津九三四郎の烽火臺なる本番の頭人増松が情願
 と目今詰茂佳福と館を請まらせらるるさ小箇様々と告知せと這
 臺下小維れる快船二艘と針見栲索さへまく求めて開が一船増松と
 阿弥七とち乗せ又一船隊八と九三四郎ち乗ら俱小艘と推し航と
 操りて漕必さ小皆是上総へ波の上自由ゆる果茶風激波とめとせむ
 又只這四個兩船のさるる烽火臺の頭人の尚総角増松が忠勤を賞
 感して俱他等と帮助んと別快船十艘小雜兵百十數名とち乗せ

増松九三四郎等不從いせし増松九三四郎等の目の棒に便宜を以て焼
 殘りたる敵の巨艦の流るを迂留り曳繰りて這方の磯に維々者勤る者勤る者又
 見どり海を撈りて敵の亡骸を索る自家の士卒の戦歿の稀を敵の火
 焼れ水に溺れる屍骸の數多し盡へるも有恁一程の扇谷の先鋒の小頭人
 水禽隼四郎緑林錦帆八四郎近範の原是海賊の頭領るれば水戲至妙の
 本事ありとどりて敵の艦を燻れ時俱に水中の火を逃れて波濤を被びて取死
 るを既り其艦を焼亡て流る板子と抱り身を浮せ波濤のまゝ流れて在り
 焼殘りたる艦を逢りてち乗れ逃れ去らんと思ふものごと亡目龜の浮木に似てあり
 かく海廣く波暴れければ便宜を以て一の烽火臺より加勢の雜兵の船より
 是を見出ると是も亦敵の自家の軍兵の浮屍骸なるべしとて見出るとは
 極よく船を載りて緑林と近範の俱あり便宜を以て猶も死する面色を

は一雨毒時氣力と頭を共侶の衝と身を起し其威勢初に似し腰に残り大刀
 引抜き船を敵の雜兵を斫り又斫りて其の船を驚かす餘の雜
 兵も中る者多く散動して瘡を負ふ者多し當り天津九三四郎の隊八と
 只二人別船に乗る在り今この異変を驚かして俱に船を漕ぎを多し件の船に
 乗移りておれ白徒卒介をせと喚禁めり刀を抜きて水禽隼四郎緑林
 と刃を交へ一上一下と聲をひびき殺結ぶ程もあらず増松も亦是を見り吐
 嗟とむり親阿弥七と共侶九三四郎を援んとて船を這方へ漕ぎて來ぬ所を
 錦帆八四郎近範の多くも是を見り増松が童年を悔りて敢て敢又物
 とも思ひ近づく隨ふ其船を航して閃りと乗移ると阿弥七の乗せたる械の
 走を近範の隻脚を飛り蹴りて又増松を敷きんとて振見ゆるは刃の電光を
 うあら返近範の目前に燈と起し陰燐の光り近範憶む眼を射られ苦と

4



八代傳九郎卷四十五

五

文安堂藏



八代傳九郎卷四十五

文安堂藏

たれか。藪の枝の末の学ざりける。約莫其の日の梓は。此の八郎。鎌倉の源
 大平。鞍馬の牛孺丸も。伯仲と死に段あり。并といふを。と原る。上の出像。不見え
 たる如く。初錦帆。八四郎。近範。が。這方の船。移り來て。増松。危ふり。時。怪む
 べ。其。義父。荒磯。南弥。六。が。在。一。世。の。形。貌。変。り。身。の。細。鏢。の。衫。甲。の。重。鉞
 打。る。肱。甲。十。王。頭。の。脛。骨。一。て。黒。金。表。装。の。大。刀。を。踏。へ。忽。焉。と。一。て。影。の。如。く。立。頭
 れ。近。範。を。遮。り。林。末。を。動。せ。身。一。箇。の。陰。火。と。做。り。増。松。が。口。中。へ。閃
 め。入。る。と。見。る。程。小。増。松。奮。勇。日。屬。の。似。ぎ。武。藝。剽。姚。向。前。前。る。矢。場。の。勁
 敵。近。範。を。斫。て。兩。段。小。做。あ。の。さ。る。又。緑。林。の。疾。を。負。せ。輒。く。他。を。生。拘。り。且
 九。三。四。郎。と。隊。八。を。極。ひ。は。る。戰。功。の。則。是。南。弥。六。の。火。の。致。き。所。を。九。三。四。郎。隊
 八。と。云。夢。さ。る。も。是。を。知。ぞ。只。阿。弥。七。の。近。範。小。跡。ら。れ。て。仆。れ。し。時。の。奇。異。を
 認。ゆ。と。其。言。分。明。る。の。さ。る。増。松。の。那。時。も。眼。光。を。聲。音。さ。へ。よ。く。南。弥

六。小。首。さ。る。と。さ。る。心。術。猛。可。小。大。人。備。は。誰。非。を。疑。ふ。員。明。を。首。を。墜
 八。並。不。知。後。雜。兵。都。下。の。奇。談。を。知。者。呆。る。ま。不。感。嘆。一。て。那。南。弥。六。が。義。仗
 る。死。て。後。も。靈。亡。じ。を。眞。助。と。其。子。の。む。せ。り。伏。姫。神。の。亞。る。べ。と。稱。て。美。談
 あり。け。然。亦。幸。九。三。四。郎。の。隊。八。も。其。疾。疾。窮。死。る。に。疼。痛。甚。し。く。を。俱。不
 汗。衫。の。袖。を。裂。ぎ。其。疾。口。を。巻。る。と。去。却。緑。林。を。責。て。去。の。兩。個。の。姓。名。と。定。正
 存。亡。と。問。け。る。始。は。左。右。さ。る。い。ざ。り。一。つ。も。深。瘡。の。上。る。竹。葉。堪。ぬ。則。其。身。と
 近。範。の。姓。名。出。処。又。定。正。の。憲。儀。后。細。等。を。援。け。られ。小。筋。小。無。と。逃。れ。去
 る。ら。ん。と。い。ふ。又。只。あ。の。の。さ。る。加。役。の。船。引。上。る。敵。の。屍。骸。を。舟。中。の。扇
 谷。の。先。鋒。の。頭。人。大。茂。林。小。彦。濱。川。小。渡。等。の。餘。有。名。の。士。と。言。ふ。誰。も
 知。る。と。い。ふ。亦。亦。亦。時。緑。林。の。見。せ。ず。稍。是。を。知。る。と。い。ふ。時。自。家。に
 諸。軍。兵。を。燬。を。免。れ。敵。と。好。む。も。な。れ。ば。這。頭。小。存。る。べ。も。中。を。獨。軍。師。大

阪毛野が一隊の戦艦數十艘の洲崎の澳に獵見を下あて。一霎時士卒を
 總へる存り相距ると三四十町を過たされ九十四郎増松の美を軍師不告
 んも。則告水會集四郎緑林並錦帆八四九郎近範大茂林小彦智
 濱川小渡鏡久等の首級亡骸と船を載り漕ぎ其里を赴て言信々と
 委曲を嚴密して且生口緑林と近範を首級と軍師の実檢入れ久瀬智
 賞感大なるに恥て九十四郎増松阿弥七郎八等不對面を其戦功を言て
 且の事就中守り如は増松が武勇拔群る是併其義父南弥を神靈の
 致す所歎義士の俠氣死して七びき実不感ざる餘りあり我の徑を武藏へ渡り
 敵の脚を止せりと欲せ汝等ハ又輕く洲崎の御陣へまゐり。俱功を奏し
 了れ我も亦勝軍の美を告せんと。隨即兩個の老兵を課せ。注進状を
 らまふ増松等が戦功の美事と寫載ら。悠而件の老兵等ハ増松等が

船に乗て俱洲崎の港口る望洋臺へ赴て程生口緑林の深瀬へ堪て
 船の内中死ふけの然い流智の隊の頭人小森高宗千代丸豊俊浦安友勝本
 曾季元等ハ後件の奇談と所者義成主を首中七太士四家老諸頭
 人雜兵奴隸土民社客婦女童蒙に至るまで感嘆せらるるのり。不題との
 日の曉天大村大角礼儀の料らる新井の澳あり。三浦景三郎義武亦留
 せられて艦の前後と争ひ已まぬ角口の時程り。天の明えとある時
 あり而敵の闘戦起りぬと争ひて猛火遙天を升り。餘煙這方へ飄舞
 以る哉初の勁風乾る。其風猛可吹変り。既其不倣りされり。大角
 これを瞻仰。原来闘戦那圖不當れ。今や口論の時を移さる期
 後れん兵每艦を疾遣らる。と喚り刀を抜て敵の楫を斬る。船の
 拂へ堀内雜魚太郎貞住の勇る聲と震起。士卒を罵り促し。敵の楫

たる釣索を所拂ひ又所断せて漕の去りま欲まれの義武愈怒る港に
 噫鳥崎の白物每非如管領家の兵とも鳥合の野武士を魁せられ何を
 ひと面白せん兵毎先那百中を撃捕く蝨く水路を開きと喚り喚る聲と
 共小競ふ新井の二頭人水崎筆人甲良龜九小磯真砂五八舵工下知して
 一瞬間に十餘艘の戦艦を獨樂の像く漕続させ大角が十艘の船を送
 る捕籠て較んと找むと大角の敢又物ともせ四下小响く武者聲高く義武
 听れ我鳥崎るらんや若們反々鳥崎技を我豈赤岳百中るらんや實も里見
 股肱の臣是八大士隨一人犬村大角礼儀之我定正と謀り必く你が親義
 同船を借りしに要あるのみ今朝も寄敵の背より火を放さま欲せぬ
 中く你の拘留せられて那期の後不腹堅今先若們を斬りて新井の城を
 攻捕てみづら其愚と知るるる兎を脱て降りむとらせも果む義武を

且駭死まき怒りて原来里見の間謀見ふ欺れしを悔一けれ兵毎先其大
 角奴と捉へ又蝨く牽りて来よと脚踏鳴りて焦燥も既新井の隊の兵們の
 思さけるの敵と里見の名高る犬士の一人犬村大角礼儀と名告ると聲で
 一より勢ひ折けく左右多く找も義武のよく焦燥くみづら鎧どうち振り
 うち振ら近く敵と刺し水崎筆人甲良龜九小磯真砂五八是れ氣を
 ゆる漕寄々々船と連り不找れが惴雄の壮佼本事ある老兵と各先を争
 ふす不或敵の船小乗程り或又乗程られて連り不挑戦も礼儀と兵を
 用れ小勢中々及て撓ぎ責任の亦衆先と奮戦突戦術を盡せら
 義武隊兵三居して驍勇向ふ前るる勝と取る易くねはるる雌雄と分
 ぎ折る洲崎の澳る兵孫火の風をま吹散されてあ亦飛ぶるる既
 一團の敢火閃て新井の船を柴薪小燈と降かる程もあ其船忽

地猛火と作り。防がぬ術る死士卒の吐嗟と云う驚馬噪だて焼れて死すも
多るべし然る暴成を祝融の祟り又只是の事とて其火四下小飛程りて義
武の隊の船を燔く者五六艘及び甲良亀九郎小磯真砂五郎水崎
蛸人士卒も俱不幸く他船も乗程りて道れ去りて欲せし大村大角堀内貞
任艦を風上より相找めり士卒と駈て攻戦大刀風烈りければ敵の頭人
亀九郎蛸人真砂五士卒も各痛癢不堪難々首を並べ俯すも
或海へ飛入り死活を知らざるも多し。當下浦暴二即義武の火中も慌
て敵中も怯まざる士卒と罵將して近々敵を刺しけり聞戦も劇多し
其鎗竟折れ火光不就大角の乗方船を乞と見り。さや組んと身を
跳せり。飛入る大角組せし身を反して其身を合々引投し板
子の上へ投し其自家の士卒折累りて押さ索を引けり。義武擒るる

あう敵の残兵皆降参りて。這里の中開戦果けり。登時大村大角の堀内貞
任も召集合りて。我憶も。這福鬼小拘らりて。放火の時。後ま
今。洲崎の澳。造る。六日の昔。昔蒲十日の菊中。倒し。要る。係。べ。査。ま。る。
大阪が逆謀り。八百八人の術。乃。て。自家十二分の勝軍。ゆ。あ。ら。ん。が。因。て
又。意。不。義。同。其。子。の。我。為。小。擒。る。る。と。少。知。る。必。然。不。堪。ぎ。て。時。を。移。さ
む。推。蒐。ま。る。合。復。も。欲。ま。べ。開。を。我。切。所。不。埋。伏。して。敷。破。ら。ん。が。ら。ん。が。
其。隊。配。の。箇。様。を。言。詳。呼。び。示。せ。負。任。並。老。兵。們。も。皆。欣。然。と。諾。ま。り。
俱。小。隊。分。と。定。る。小。二。百。個。の。隊。の。兵。小。降。名。の。敵。兵。を。相。加。へ。通。五。百。餘。名。不
る。ぬ。則。是。を。二。隊。小。分。ち。其。一。隊。小。負。任。を。頭。人。を。佐。而。大。角。を。生。口
義。武。も。猶。船。小。存。す。七。士。卒。五。十。名。と。り。守。り。と。ま。他。の。皆。艦。を。燔。て
水。際。小。登。り。ち。程。小。天。の。明。け。鳥。鳴。渡。り。て。朝。霜。白。く。風。寒。る。小。程。新。井。の

城王三浦義同の其子暴二郎義武が敢病後を敷きとる。今日水戦の先を
せんも隊の軍兵をわく出で死をいふと思難く再宿せりせりける時
近習を慌しく枕方おきて告る。目今澳の方より猛火の光り雲入
す。中天の映きと告る者のいひを船火事と見ると程小郷向小郷君が従
ひまゝの洲崎の戦場へ赴けし頭人甲良龜九郎と其隊の雑兵兩三名
俱小痛癢を負りて城門を敲らるる。城門を敲らるる。火急の注進いんと告る。義同
も果さず横見反復一岸破と起てを安らるる。取て先我听ん袴をのちねと
いそぐ。身装して大刀を佩らし燭を秉き。近習をよ伴従へ。蝸く
廣塚も立必其頭の雨戸を開かれ召を遣し。と甲良龜九郎は雑兵共
侶小身尖刀瘡濡鐵の吊腿重げ庭門より走り入り地上に坐され義同
又蝸く聲を被り。やれ甲良龜九郎ある許る其身の刀瘡故をあらぬ。いふ

おと。向へ答て然し御向小郷船を貸し。那赤岳百中の扇谷の加勢も
らぞ実へ里見の犬士とゆえ。大村大角を以て然る。欺り借り。柴薪も
寄隊の艦を焼盡さむ。欲せし我郎君の抑留せられて合期せざれば怨み
堪む。みづう。実の姓名と告りて聞戦ふ。及小郷寄の方る兵隊の最も遠
蜚散り来て我艦も焼く。是より自家利を失ひ。敷る者甚く。且
郎君の御武勇るも。御病後。甲斐。折れ勢窮りて。竟か槍を
ぬい。他小磯真砂五郎及水崎。人戦殺せ。後生拘られ。後開。知
る。惜る。身存命。何容々。と。か。の。あ。り。い。ふ。を。報。つ。ん。と。思
な。り。ふ。い。ひ。と。勸。解。り。息。と。吻。り。雑。兵。も。喘。を。止。め。て。い。ふ。上。不。思。な。る。義
同。の。怨。み。堪。む。原。来。赤。岳。百。中。の。里。見。の。犬。士。で。あ。り。て。鈍。も。那。奴。謀。り。
三。々。士。卒。と。喪。ひ。の。さ。る。我。子。と。槍。を。せ。れ。り。武。門。の。恥。辱。さ。り。上。を。遠。く

大傳九郎義同

士

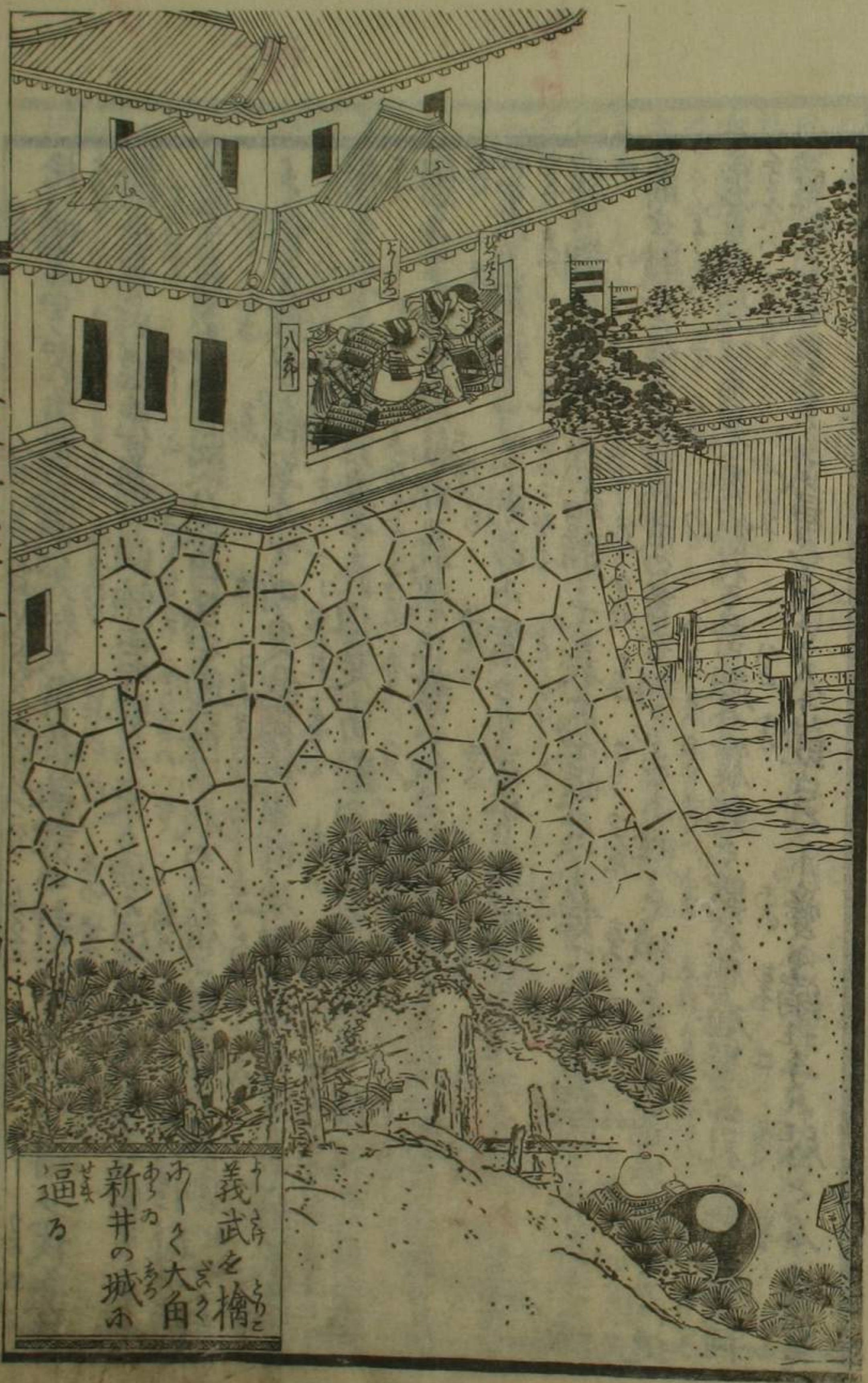
大傳九郎義同

去り許さず。血中を怨を雪ん疾陣衝して人馬を聚へよ。そらくと近習を推立遣りて其身の奥へ退て時を移さむ我衣して肩尖刀引提て廣椽へ二ひ出さるる程不素より武備不備しぬ家風不従ふ勇士猛卒皆奔奔と探甲を越く廣庭に聚合者甲し百名許るべし尚聚ぬも有りとも。手を合はれし中を我同馬を走らせし所を以て肉のころ乗らる後れ者跡よりをせしと乘て馬を拍れて用正城の鏡口より橋を渡り其驀直馬頭上を投て走り其従ふ兵皆後れと喘々を續けける。憊而涌義同の怒を棄せて去向を以て其敢前後に見えし驀馬を以て走り猶驚かり心地し口管を走らる其路の遠くは程を左右深く敏より立ちたる冬樹の邊を過る時思ひける左右限より發せし鏡口の响と共か忽焉と喊聲大く起りてる不も回る鏡响前叫敵の前後を亂し頭れ者兩隊の軍兵左のころ大村大角右のころ堀内貞住士卒と馳て突然

と鋭尖の鎗尖當る前を虎豹の威勢驚か噪く敵の衆兵を刺し又數破り四下を响く聲の劇しく思ふなる三浦義同結ぶ鳥奔入る。獸不異るを尚戦す欲する命惜く降参せし大村大角の不在り茲あて名告りて推捕籠る八百勁雄聊の透あるとされし義同の辛くを。稍一方を殺辟し馬を輩して逃走れば況や士卒の立脚もや或は敵を生捕られ或は命を免れんと降参参るの甚くは其の敵不義同の一騎幸くして城内へ逃籠りて猛可橋を除せ城門を用さる大息吻てを居りける。

第百七十六回 追兵屢逼りて忠臣主と極ふ

却説大村大角礼儀の既し士不謀りて戦ひ勝むとのとるければ權且路不士卒と總へ腰戰飯を披さる敵の馬さへ獲りて縁と索めて



八天傳九輝卷四十五

西

○文襄堂藏

義武を擒
 新井の城
 通る



八天傳九輝卷四十五

○文襄堂藏

○

大角

自住

借るも。船を借り我子戎
 槍も。奸悪兇暴。尚飽害。勢も。乘り城も。迫りて。又何事。と。いふ。ま。や
 と。聲高。う。罵り。向へ。大角馬。を。斬。際。小。枝。め。徐。小。答。る。や。奥。州。義。同。先
 と。怒。を。理。め。我。の。や。と。听。我。儀。軍。師。胤。智。の。相。計。も。り。て。船。も。當。城。の
 借。る。と。い。ふ。も。借。る。死。為。る。は。但。是。寄。敵。の。大。兵。を。火。攻。し。て。扇。谷。定。正。主。戎
 懲。さ。す。欲。せ。小。仙。郎。義。武。王。救。不。我。を。赶。蒐。來。て。竟。小。聞。諱。不。及。び。り。
 已。上。と。い。ふ。も。則。小。牽。り。來。れ。り。和。殿。速。小。先。非。を。悔。我。と。迎。て
 罪。と。謝。し。る。我。も。亦。和。睦。し。て。義。武。を。返。去。し。恁。て。も。惑。ひ。醒。ぎ。て。拒。て。防
 箭。を。射。ん。と。る。先。義。武。の。首。を。削。り。小。唾。し。て。城。を。屠。ら。ん。甚。麼。を。と。問。返
 せ。義。同。の。少。も。果。た。怒。れる。苛。聲。震。起。し。默。れ。慄。慄。見。不。礼。へ。我。を。是。兩
 管。領。の。親。族。中。武。勇。の。人。小。饒。され。小。愛。小。溺。れ。子。小。願。今。や。里

見。小。從。ん。や。と。い。つ。備。小。引。付。措。た。は。鏡。砲。と。情。と。合。揚。し。只。一。發。小。大。角。を。
 寬。敷。と。ん。と。欲。ま。小。火。索。失。く。ち。ま。る。り。と。心。慌。く。八。郎。草。頭。九
 疾。敷。と。ま。と。い。つ。後。方。と。見。る。處。を。勇。草。頭。九。郎。草。頭。八。郎。と。嘔。泣。く
 背。より。義。同。の。左。右。の。腕。を。權。る。り。小。草。頭。と。合。さ。し。控。と。候。伏。せ。登。草。蒐。と。
 宛。虎。を。結。紐。る。が。像。く。緊。く。索。と。被。り。小。義。同。の。吐。嗟。と。む。り。小。叫。ぶ。も。其。甲
 斐。あ。り。索。小。か。折。ら。救。ふ。近。習。の。死。を。悔。る。の。目。涙。て。眼。と。睜。り。在。り。
 送。恨。方。方。る。り。け。り。當。下。勇。草。頭。九。郎。草。頭。八。郎。の。兩。聲。高。く。喚。る。や。大
 村。主。諸。軍。兵。及。城。内。る。人。々。も。耳。と。傾。け。皆。と。听。ね。當。城。主。三。浦。義。同
 小。安。房。の。潘。臣。田。稅。戶。賀。九。郎。逸。時。若。屋。八。郎。景。能。が。謀。り。て。既。小。生。拘
 たり。城。内。る。士。卒。皆。救。不。主。と。救。ん。と。ま。と。出。さ。先。義。同。を。結。果。し。て。且。若
 們。を。誅。戮。せん。我。隊。の。兵。們。城。門。を。開。けて。大。村。主。と。招。待。せ。し。と。西。下。小。聲。

と共義同を牽立く。又城樓と下りて、刀を抜、義同の頭を楚と推
當れ、正門の頭人其隊の城兵の之を驚かす。其間、時景能の隊の兵十名有餘、門を閉、橋を架渡
敢近つ者あり。其間、時景能の隊の兵十名有餘、門を閉、橋を架渡
を、大角を仰れ、大角並、自任、其の事、便宜、毫も猶豫
せ、馬を又蝮め、俱、城を乗入れ、從、兵七八百名、義武を牽立、咄と
嚙、綱入る勢、崩る、岳、異なる、城、内、在り、とある。士卒、皆、一驚
噪、但、蟻、雜と散、去、像、皆、後、門、より、逃、去、り、迹、小、殘、さ、し、婦、幼、の
號、哭、ふ、の、ミ、ヨ、リ、と、空、を、大、角、先、老、兵、小、吟、吟、と、開、と、一、緒、小、集、合、せ、且、慰
め、且、勦、らせ、士、卒、の、乱、妨、と、戒、一、城、中、栗、靜、み、る、及、徳、而、田、稅、逸、時、昔、屋
景、能、の、生、口、之、浦、義、同、を、自、家、の、士、卒、に、渡、し、守、らせ、且、大、角、も、小、栗、内、を、
從、城、の、正、廳、小、請、ま、れ、大、角、則、自、任、名、と、俱、小、馳、馬、より、下、立、設、の、席、小

就、一、從、老、兵、武、勇、の、每、俱、小、鐘、の、袖、と、連、わ、く。左、右、二、側、小、羅、列、れ、り、徳
而、逸、時、景、能、の、又、改、め、大、角、と、自、任、名、小、對、面、せ、り、俱、小、其、席、小、入、り、
大、角、の、の、兩、士、の、功、と、賞、て、且、の、思、ひ、さ、や、田、稅、甘、屋、和、殿、等、の、比、蟹、崎
十、一、郎、と、共、侶、小、京、師、へ、御、使、小、立、け、る、小、の、城、内、小、在、ん、と、神、る、と、ぞ、と、孰、く、知、
免、故、と、あ、ら、め、甚、麻、を、と、問、へ、逸、時、先、答、て、然、人、且、義、小、蟹、崎、生、と、共、侶、小
水、路、を、京、師、小、赴、く、程、小、其、船、遠、江、灘、と、過、る、時、凶、類、や、漏、れ、け、り、仍、も、お、や、ら、む、
波、濤、小、揺、ら、れ、て、既、小、反、覆、ん、と、思、ふ、と、屢、を、誰、か、も、更、小、活、方、心、地、せ、皆
死、と、極、め、存、在、け、る、程、小、舵、工、等、相、占、ひ、て、蟹、崎、と、我、們、小、告、る、や、今、の、船、の、凶
類、其、生、年、壬、癸、る、人、小、在、り、その、本、命、の、人、々、と、擇、除、く、蝮、小、離、筋、小、ら、も
載、流、一、葉、の、ひ、る、自、餘、の、人、々、の、恙、も、あ、ら、ぬ、船、又、よ、く、走、る、べ、し、を、
惴、立、れ、の、大、家、敬、驚、た、息、受、る、の、と、默、然、と、開、中、小、我、們、二、人、找、と、出、く、蟹、崎、生、小

向ひての事。他人の知む我々の任癸の生年。月も亦是。小丁。其の他伴當
夫役も。必る。此と。ぬ。さ。べ。這。船。遊。山。詠。水。の。為。り。傳。尊。尊。ある。事。俱。不
天命。と。觀。念。し。て。浮。沈。と。河。伯。不。儘。も。せん。俱。不。君。命。を。美。り。と。京。師。へ。赴
く。海。上。中。免。れ。が。死。命。と。知。り。身。を。犠。牲。に。做。ま。と。惜。ま。て。其。年。を。人。を
も。殺。さ。不。忠。の。至。り。の。上。や。あ。疾。離。船。と。り。下。し。て。我。們。二。人。を。得。載。し。今
ゆ。隱。ま。と。う。と。必。死。の。覚。期。不。獲。され。遂。不。其。生。年。の。任。癸。を。告。る。者。伴
當。五。名。あり。舵。工。六。名。あり。我。們。と。俱。不。十。三。名。送。別。を。惜。ま。下。し。離。船。不
ら。乘。れ。の。登。崎。生。も。せん。術。を。さ。小。只。訣。別。の。涙。と。泣。き。其。天。命。不。儘。せ。る。現。船
公。の。口。占。も。時。小。稱。へ。當。ま。る。哉。我。每。十。三。名。別。れ。離。船。不。乘。り。と。凶。類。立
地。不。解。不。けん。本。船。の。風。の。ま。く。西。へ。走。り。と。見。え。さ。る。の。然。ら。ず。亦。我。們。が。乘。る。船
離。船。の。覆。り。も。せ。回。く。潮。水。不。揺。れ。て。或。の。東。へ。吹。續。され。或。の。西。へ。推。流。され。て

大洋。不。漂。を。一。日。一。夜。小。ひ。た。と。の。景。能。語。と。續。く。憊。而。其。次。の。日。船。人。さ。へ
恙。多。く。流。寓。り。く。之。河。を。昔。子。崎。不。就。と。港。口。人。等。の。邦。助。不。因。て。旅。宿。を
求。め。那。地。不。在。り。漂。流。の。事。の。顛。末。領。主。隣。尾。殿。不。安。え。と。隨。即。別。船。を
と。安。房。へ。返。さ。べ。と。あり。不。漂。流。艱。苦。の。傷。れ。也。あ。ら。ん。逸。時。並。不。伴。當
も。病。煩。ふ。者。多。り。り。れ。又。其。醫。療。不。日。と。費。り。て。十。二。月。の。初。め。り。一。時。候。逸
時。も。伴。當。も。病。着。稍。瘥。り。と。隣。尾。殿。不。宣。し。て。船。を。借。り。て。還。り。ま
く。欲。ま。る。程。不。猛。可。小。里。巷。の。風。聲。あり。扇。谷。山。内。の。兩。管。領。諸。侯。と。連。ね。て
水。陸。より。安。房。上。総。へ。推。寄。り。里。見。殿。と。攻。伐。す。と。其。言。孟。漢。を。され。り
我。們。心。うち。驚。駭。れ。て。借。り。船。不。皆。うち。乘。つ。連。り。水。路。を。た。ま。の。り。幸。な。ん
上。不。又。幸。あ。ら。相。模。灘。を。過。る。時。暴。風。又。吹。出。し。船。を。お。ろ。ぐ。も。あ。ら。ん。か
已。と。を。引。帆。を。り。下。さ。新。井。の。浦。不。歇。り。と。當。城。の。番。卒。等。討。て。船。を

俱不次の間へ退りけり。然るにその時三浦義同義武の里見の士卒ふち守ら
まて次の間ありけり。逸時景能の實名実事を送るも洩せしめず。筆で
夢の覚る如くいと悔しく思ひけり。愆而逸時景能の義同義武を牽立
來て則正廳の簷廊へ程よく楚と推居れ。大角見々身と起して先義同
と義武を受合せり。そが儘小上坐を推登して被る索を解んとまると貞住
逸時景能等うち散馬を放止め。詞存一諫る。虎狼の猛も媚
憐を求る者へ四足を括られ。故に況や義同義武の俱小足武勇富り
替力百人を合さ。死勁敵るも甚麼を被る索を解。のみ只是千慮の
一失。歎慈悲も作善も敵小をよめ。定小危は所行るべ。と糸を大角
へむ。否とよ。掛を揚け角を劈く。刀力兇猛の敵と糸とも。仁義小く勝正。
然るに我君至仁至義の軍令小遵由りて。その親子の索を解ま。敵るがらも

城主の礼を失へ。と思ふ。然るに他者不仁。小く。日茶よ。て我を害さ。各
も空しくして他を殺さ。見ても己んや。然るに他者悪名と永く世に貽さん
の。權且酒家小任せぬ。と論う。駟く義同と義武の索を解棄す。且慰
め。小成敗。天の時運。然るに所誰う。和君親子と勇るとせん。あ
まども。今我為小。虜小せられて。馬前の奴小。做れる者へ不仁を。て仁を伐り。兩
管領の悪を資け。日茶と。さ。故に抑我君里見殿へ行ひ。仁義小
あらざる。と。あ。の。我。們。其。仁。心。を。仰。て。京。で。大。阪。犬。山。と。共。侶。小
今番水隊の防衛。使え。只大敵を防ぐ。と。多。く。敵。を。殺。し。長。く。駟。て。城。を
攻め地を畧して。境を増さ。と。饒。され。然。れ。も。聞。戦。の。常。情。也。時。氣
と勢小乗ると。死。敵。の。城。地。小。馬。を。敷。系。せ。我。隊。の。兵。の。集。合。と。總。を。さ
る。と。信。れ。其。間。和。君。脚。父。子。と。水。路。より。敵。潘。縮。村。へ。送。る。宅

眷連をも船に乗せ共侶小と思へども婦幼の故ら風濤の害怕あり。
 故の御連は皆當城に留置せし宜く扶持致し。其の美心易ら
 て且里見殿に仁君と和君御父子那地不造り多敢停囚せし見る事
 るに礼貌必厚く候べし。徳而東西和睦るに御父子共不當城に返されん
 り。日と俵々俟つべし。其の美心易らんと詞徐に説諭せし義武
 嗟嘆して黙然とく羞る色あり姑且して義同ら又たるを鮮く
 腕を拍り答るや。趣皆理あり。咱も親子の馬を馳り射刀と
 其と年来業とあるの。文学智術不浅けれ心鈍くも謀られて且盗
 糧と齎し仇の及と借まき不禍竟不蕭牆の内より起ると悟らぬ城陷
 ず。親子楚囚なるの首と捕れ幸らん小豈遙々と安房へ見えや。
 願うに情みそと辭ふを大角慰め。又逸時景能あるるはさう這

親子と別室に移して守せし。徳而大角へ士卒と水陸へ遣して洲崎の
 水戦の勝敗と山内顯定の鎌倉の光景と撈らまふ。洲崎の閉
 戦の寄隊衆艦を皆火攻せし。自家十二分の勝軍ありと云又鎌倉
 の顯定の館に老黨齋藤左兵衛高実が。水戦の大敗と新井の城に大
 村殿が攻落されしと知り。驚馬怖るに大なる。躬に主君の宅眷
 俱して館を無遺蹟と埋めて。往方もあまざる。況や山内の家臣
 誰れ一個も留る。家火を船に運載。宅眷とわすれ水路より落亡し。と
 夢えけり有徳一程に三浦四十八御身。御士豪民村長莊客等。八年來
 里見の仁政を慕ふ。思ひ。各々戎衣し。新井の城に詰來。俱に
 大角の隊に属す。當城を守らんと願ふ者千と。數ふべし。又只是のふあ
 主御の城と番集て逃亡する。新井の城の士卒們と甲良龜九良さうりあて。

や箭を折り誓言と做して降を請ふ者城が充けり。あつて大角の招むては
 野所七千あまの隊の兵あり。然る鎌倉の都會の地あり。且阪東の咽喉
 あり。尚長氏に据られ。後々々々の害をくんとす。隨即堀内雑魚太郎貞任
 雄兵二千餘名と授け。那地遣して鎮守とす。貞任則山内の館を陣
 営やて。民が治む。善政とせ。賊民の乱妨あること。あの大角の
 教ふより。徳而大村大角の古屋八郎景能を課す。あ地の勝算
 顛末と那身並不逸時の奇功の趣を。洲崎の御陣へ注進して。生口義
 同義武を館へあつて。隊の兵三百名と授けて。注進状一通と遞
 與。あ景能則快船十艘。従兵を分ち。兼せ。義同親子と守護
 あり。洲崎を投ぐ。漕せけり。介程。大村大角の坐る。三浦四十八郎を管
 領して。善政のいさる所。村長老。老約。法度と寛く。され。敢

叛く者。税飲の言り。と。寡く合れ。も。調る者。あ。と。倉
 廩。と。用。と。寡。孤。獨。を。賑。けれ。民。皆。其。德。澤。と。仰。て。父
 母の思ひを。做。ま。の。鎌倉及新井の郊外。近。属。豺。狼。と。あり。と。
 夜々人を害ひ。礼儀が。件。の。城。在。り。日。豺。狼。皆。夜。紛。れ。他。処。へ
 移。ら。ゆ。る。り。り。豈。只。豺。狼。の。と。暴。主。奸。相。侮。人。賊。民。の。好。も
 良。善。と。殘。害。して。其。害。を。喫。む。者。も。必。や。憚。る。べ。し。實。は。是。子。孟。子。の。所。云
 君。仁。る。れ。が。不。仁。な。し。君。義。る。れ。が。不。義。の。里。見。殿。父。子。の。年。來。仍。ひ
 の。善。政。の。枝。鋪。る。れ。然。も。あ。ら。ん。と。心。あ。る。も。心。る。れ。謳。歌。俚。談。の。あ。ら。う
 け。話。分。兩。頭。是。より。先。小。扇。谷。定。正。洲。崎。の。澳。の。開。戦。の。大。阪。毛
 野。の。火。攻。せ。れ。て。命。も。既。危。ふ。り。と。箕。田。源。一。兵。衛。后。綱。白。峯。麻。生
 小。廣。原。等。の。枝。掖。れ。て。幸。く。免。れ。と。雖。く。離。艘。の。乘。移。り。て。武。藏。を

投ぐ漕去る程不從ふ兵多うらば。この時同船あり左右侍る者大石
 源左衛門尉憲儀白峯麻生八廣原箕田源二兵衛后綱信城左衛
 遠頼只是のこの餘の士卒三百餘名初五萬五千ありける大兵比ま
 什一も足らねども順風よけれ漕脱く約三時許の程逃水は武
 藏多。河崎の浦も船果くく乗乗る陸も登るありより五十子の城へ言
 里も過れぬ水路を來ぬれ馬の然も總大將の御歸城も御歩初
 馬幾足り敷系はあり憲儀見く熟視て兵每那他を見上那馬
 多く那里に在り捉て館を棄せまう。我れもうち乗る五十子へ御伴せん
 牽のくもと吩咐れが士卒們唯々と心も果ぎ走りも聲奇めく。され
 馬主毎の馬守の御用へ牽りくくと喚りく鮮兒を解る五六足

奪會んとてけれが牛馬經紀も驚馬は慌る。ある理不盡ありを。縦
 守の御用へも。あら皆人の賣り馬を引と價も賜らて召さうとやの
 といつせも果は又聲劇き。這奴等大胆不敬と非如千金の馬の中せよ。
 館の急の召さるる。献らむ目物見せん。覚期とせよと馬り握固め
 巻の電光右も左も。毆死し又踊躍り。其好馬を五六足追
 立ち々牽りて來ぬれ。憲儀の含笑て。鹿悪るれども鞍鐙孰も一具われ
 尤好卒々といひも先一疋を牽上をささる。馳て定正うち乗らせて却憲
 儀廣原遠頼后綱のうち乗る。俱して河崎河原の造りて。前岸へ渡さ
 ちく欲まる。船公の今の強虐と遙不見く。害怕やまけん。船と風も
 漕退けく。前面の水際も維れ在り。雖喚々漕りてをねら定正連
 了不焦燥く。さく喚べとて。憲儀の怒る堪は。士卒平知して。

船公等と遠箭不被射殺ねと敦園果々罵ると后綱急禁め
我館の御威徳あるも聞戦敗れその為体也。御帰城といとせぬ
田夫野人の侮りも。却下知れ従ひまらぬを怒らせぬの鄙語ふと見棒
撃ふ似るべし。敵も足らぬ者と知り。这里も時を移る。遠く追来
る敵もあらん。然らば這河上る。矢口も造り各のひく津を求めぬとも。然
るも攻路の遠さをあはるの美を思ひぬらむ。と利害を評し諫め。憲儀
有理とむらり答て。いま決めぬ定正是とちや。后綱の意見誠然
る。然らば矢口も造りんと。そは休馬を歩まれ。廣原憲儀も左右も従ひ
又達頼の先も立ち。后綱の殿して。従ふ殘兵恍惚も馬を逐ひつら
け。介程も剛才定正の士卒も。惨く敷介される。牛馬經紀五六名あり。
俱も沙汰され。頭髪を乱して。身と起り。罵れが火家の伯樂里の壮校

數十名走り集りて情由と空くあり。生所も俱も遠恨不堪。これ尉めりせむ。向
火を附るのそむく。御もる開が中。馬淵場九郎長連と喚做る。老御者あり。牛
馬經紀們的。乾父中。毎不氣と使ひ事と好。俠氣とめて。自負む。破落戸
る。され。那理不盡る。扇谷の士卒と憎む。大なる。先持れる。乾見も。叱
窮め。且の事。縦管領殿の威勢とてせらる。と。經紀見の賣買東西を奪を
誰う。兼服せん。是等の。是余の。今日の。と。上。下。買係り。不。錢。を。還
さ。民。を。虐。け。身。を。肥。たる。報。ひ。今日。の。敗。軍。僅。小。二。百。餘。三。百。の。殘。兵。を。從
く。活。路。索。て。渡。せ。られ。と。云。那。為。体。を。見。ぬ。少。少。也。銀。百。多。の。損。る。六。尼
落。と。思。ふ。く。已。も。せ。ぬ。圓。金。の。耳。と。揃。わ。ぬ。賣。買。る。活。馬。と。幾。頭。の。奪。辱。を。れ。
和。郎。等。明。日。の。何。ぞ。め。宅。着。不。麻。米。と。喫。ま。疾。疴。蒐。て。合。復。さ。む。邊。魯
の。事。も。の。の。腰。脱。毎。奴。と。罵。獎。せ。是。も。勇。む。牛。馬。經。紀。里。の。壯。校。破

落戸事と好む好むも好むも勢負む似而非武者汰竹槍造作腰刀赤檣の
 棒借水竿或纏額繩禱各々身を固る場九郎を首あて合ひ残され馬
 牽よせり踏る者五六名大家競ふ開け程不武勇を好む破落戸。這里那
 里より走加りて三百餘名ありて他と對立す疾趕菟よと脚を
 乱して咄と嘯て趕りける有徳折々這津又一夥の落人あり是則別人を
 宣義の妙見嶋の柵敗れ大田小文吾檣せられ彦別夜又吾數世他大田が
 慈善其隊の兵一百五六十名と共侶不慮舟小載られ流し放されける其
 船大洋不流れ漂る或西或東して兩三日も麻生程今日も辰巳の追
 風とゆるる河崎の浦不漂着あり不定正の隊の戦艦洲崎の澳中敵火
 攻せられ其一艦船頭の焦く乗れる人一個もあらず脱棄する申曾と器械の
 多く燔焚りたる水熾さるる見ゆる扇谷家の戦艦を知ら不足し

原来今日那瀬不閉戦あり館定正の負さるる狭と思ふ宵の安うら
 ね先士卒西三名と陸小登せこの頭の風聲と撈らるる姑且て其兵
 隊の慌くかへるる箇様々と告ると所く不定正の残兵僅小二百餘名
 ね方僅まの地へ脱れ来る馬市る馬幾足飲豪奪させくうち棄て矢
 口のく赴ける又牛馬經紀們が開と怒り破落戸を三四百名取次合て
 趕く我妙見嶋を大田奴不擒せられ大刀我衣も身不添は汝達と
 共侶不這船不棄せられ放流されりより稍の浦不寓ける不幸ゆて
 自家の焦船同浦邊不流れ来て器械あり戎衣あり及合と俱不是を
 穿てその弓と彎たの鎗とあり鎗不寇なる人々を追敷きて鯛の
 做まるる先途の船と墜るる足るべく本領安堵疑ひるごとくせよとを

せが大家俱みな威勢いせい漏もる。急いそれ御伴ごばん仕つかえんと。皆みなて多く焦艦せうかんを鑿うりて。合あひて投被なる。縮ちぢる表帶へいどう上うへ押おしの箭や前まへを駈かひつゝ合あひるもあひ或あるは鎗やと扱あひ。準備じゆんび多くも救正きゆうせいへ然しからふのを先まに立つ數世かずよに従したがふ其隊そのたいの殘兵ざんぺい河原傳かはのつたひ不ふ矢口やぐちと投なげて飛とび似にく追お追お鬼おにけり。余程あま小こ扇谷あふぎや定正さだまさの箕田よこた后綱ごづなが意い見み不ふ因よく憲儀けんぎ廣原ひろはら連頼れんらい等らと殘兵ざんぺい三百さんひゃく許ゆるをおく。矢口やぐちを投なげていそぐ程ほど不ふ忽と焉やと一ひと趕お多たる敵たり其兵そのへい約やく莫な三四さんじゆ百名ひゃく皆みな没め我われ衣い衣い騎き馬うま五六ご人にんあり。多おほく不ふ審しん械がいと引提ひきひて馬うま盜たう見みと逃にげ。異い口くち同音どうおん小こ喚わりて。葛くわ地ち不ふ近ぢつと。后綱ごづな佐さと見みう。原はら來きた那牛なう馬うま經き紀き們ら。馬うまと刀やいばを怨うらま。上うへと怕おそれぬを法のほ狼藉ろうしやく天罰てんばつ思おもひ知しせん。罵ののる。無なく馬うまの鑿うつと旋まらして。未まゆると遅おそく。俟まちり程ほども。現戰げんせん世よの習俗しゆじやくめ。市人いちにんも皆みな武ぶを好このむ。場ば九郎くわじらう們らの物ものも甚おほく鬼おにれくと。器械きがいを振ありめりて。

攻戰こうせんふの時とき后綱ごづな小従こじゆ多た。敵たと柱しらる士卒しゆそ二百にひゃく餘あま名な尚なほ寡くわはあねも。嚮むか水戰すいせん火攻かこうせられて辛くるく命いのちを免まれ。纏むす戦せん飯いもあるとあけられ。饑うて闘戰とうせん如意いじる。危あやる島しま合あの敵た殺ころ類るいされて立脚たつきゃくゆる。后綱ごづな危あやく見みえ。定正さだまさも亦また已やむと。憲儀けんぎ廣原ひろはら連頼れんらい等らと從したがふ殘兵ざんぺい二百にひゃくと。找ため。后綱ごづなと援えんんと馬うまを返かへして。向むかふ浩処こうじょ一隊いちたいの軍兵ぐんぺい敵たれ。背せの出來いでるあり。其その兵へい僅わずか小こ百ひゃく五ご十じゆ名な皆みな歩あ行ゆ立たる。中ちゆう隊たいの頭かぶ人ひとと。おがれ。猛もう者しや鎗や狭せとて。聲こゑ高たか。や。これ。艦かん見み見み嶋じまの柵さくの頭かぶ人ひとる。彦ひこ別べつ夜よ又また吾われ數かず世よあ。在あり。頭かぶを並ならべ。刃やいばと受うと。名な告つ喚わり。威勢いせい猛もうく。隊たい兵へいを鬼おにて。攻破こうぱ其その田た后綱ごづなの隊たいの兵へいも思おもひ。か。援えん兵へい誰たれも。勇ゆうぎ。ん。水母すいぼの骨ほねあ。心こゝろ地ちして。

怯む逆徒を前後より息も養を攻め馬淵の徒前後の敵中り
かき多く敷く開が中頭領馬淵場九郎の箕田后細と鎧を交へて一
上二下と挑戦ふ修煉拙あわねども其器械竹槍を元々尖頭を打
折られ怯むと后細やと聲をて胸前鬘と刺をくは堪む地上下控
と墜ち馬の離れて横路のく入走れ人も逃迷ひて敷る者をもりけ
然ハ敷世が援ふより然も剛は勇勢の逆徒の或の敷れ或の又往方の
知ぞ逃亡路の障目の開けか大家勢を中定正今料は彦
別夜又吾が忠戦をいと誅く思ひく則大石憲儀をのり騎馬の邊
召よそくみづる来意と多き彦別敷世の或の憲儀に向て稟
まを臣等々の夜里見の防禦使大田小文吾悌順の妙見嶋の柵を攻破
られて憶ぞ敗軍あ及びく只得残兵百五六十名を従て船に乗る虎は

脱れて再戦せむ思ふも似ぞ其船海へ推流されて一日二日と漂ひ今日ある
河崎の浦の船の寄り一時那地の逆徒多く聚會館と追蒐多しんと既打
出ぬら風聲を多く吹きくちら驚馬を御迹を暮めてあふ果して
中途御難義の因て一臂の力も勤せ御伴の衆と共に小賊徒を夷けぬ
と実事虚談を今この僥幸の功を負て説誇る詞も果さる
折々又その河原の横路も野鬼來る勁敵の是則別人の大山道節忠
與へ剛才の地の開戦小主と喪いて走り來る馬を捕駐て乗る者甲乙俱
三騎を左小荒川太郎一清英の右小印東小六明相の兵一千五百
名一隊小做して前後と乱る魚鱗鶴翼相備て群る虎の谷と下り羊と
遂る威勢振然四下不响く武者聲尖鋭く逢一定正背を見せ往る正月
高殿を休か頭甲と射て落して舊君の雙言と復すのうら首級を捕む

あつ。盡さず足らぬ飽りとせざり。煉馬の舊臣武藏の豪傑今も里見の防禦
使多。犬山道節金碗忠與るぞ。忘れさせ返せと喚れ。敬馬は怖る。定正の巾之
憲儀。廣原連頼后綱數世も俱く吐嗟とる。胸と淡き再度の勁敵免る。々
もわれ。残兵四百五十六名と。杖を路と断空。敵と河原へ。一霎時の防
に戦へ。印東明相荒川清英真先馬と馳入。鎗を敵と刺し。武勇の傲
ふ其隊の雄兵と嘯て。七千一。駈敗り。又數を乱。其然や。も餓る士卒。們は
勁敵を殺顔。され。或の瘡を負ひ。命と預。残る風。逃亡。隊斑。あ。一。數
世。印東小六。撃られ。又白峯廣原と。信城連頼。道節清英。小數。れ。け。并。中。不。獨
箕田后綱。數。所の痛。癩を負。る。只。定正。一。歩。も。速。く。落。さ。ん。と。思。ひ。の。近。習。の
杜。依。兩。三。名。と。俱。踏。止。血。戰。て。竟。一。騎。も。免。る。者。る。乱。軍。の。中。小。皆。戰。死
あ。人。小。臣。る。義。と。失。至。敵。多。も。あ。の。人。あ。の。と。道。節。即。是。を。答。ふ。け。の。欲。を。定

正と漏る。は。あ。れ。其。初。路。の。高。を。數。び。て。明。相。清。英。と。俱。馬。を。懸。へ。も
あ。を。鞭。と。鳴。り。隊。兵。を。駈。て。那。里。を。も。と。軒。あ。り。の。介。程。小。肩。谷。定。正。大。石。憲
儀。と。俱。主。從。二。騎。僅。く。從。近。習。之。名。と。左。右。立。せ。津。と。帝。を。み。東。弓。矢。口。と
投。け。ぬ。程。近。習。未。だ。荒。川。清。英。印。東。明。相。二。騎。の。頭。人。隊。兵。と。杖。を。是。馬
と。人。馬。の。脚。响。近。て。免。る。も。あ。れ。定。正。相。從。三。個。の。近。習。已。と。引。引
返。相。逆。防。に。戰。ふ。狀。と。見。る。程。怯。れ。ら。ん。狀。あ。る。で。這。頭。小。隈。中。竹。數。の
潛。り。入。り。逃。亡。け。り。明。相。清。英。是。を。見。て。定。正。今。日。没。脚。解。き。も。捕。ま。せ。ん。と。馬。を。並。べ。て
連。競。那。時。遅。く。這。時。速。く。那。取。水。竹。の。數。屏。と。内。も。托。地。と。推。倒。し。て。頭。れ。か。援
助。の。隊。長。後。より。續。く。雄。兵。四。五。百。又。強。く。隊。を。建。固。め。鎧。砲。障。を。發。出。銃。响
烈。り。か。り。け。り。明。相。清。英。士。卒。と。制。め。敢。四。小。戰。を。當。下。件。の。隊。長。今。竹。數。の
逃。入。定。正。の。近。習。三。名。と。逃。し。も。遣。る。數。捕。り。又。鎗。の。尖。頭。不。串。は。其。首

八天傳九軍卷四十五
六八
○文藝堂藏



八代傳九再卷四十五

廿九

文藝堂藏



八代傳九再卷四十五

文藝堂藏

級を振棄て敵に向ひて喚ぶや追隊の壯健を憚りませ我父道灌の密
 意不因隊の兵を於て遠地方の我君を俟ゆる巨田新六郎助友と名止る
 果ぬを折道節馬を走りせ多原來助友と名那奴の荒茅山の宿懸あり
 先那奴より敵を捕まへ竟不定正を漏れやせん印東荒川躊躇ふと兵毎
 蒐れと焦燥は明相清英血氣の衆兵羨りぬと心も果ぞ入られてを戦ひけ
 正小是老龍虎魁雌雄と争ふ豈九庸の闘戦るんや一場の大殺思ふ
 然は足曳の山も是が為鳴動して群獸走り勇魚取る海も是が為風噪
 びて鮮介も沈み守の段の尚長やうやく五巻中てりまはる腹稿ありあ
 るとゆゑ又三巻と増て局を結ん江湖上の諸看管這兩雄の勝負を
 欲くは又巻と更め且下の回解介ると聴ぬが
 南總里見八犬傳第九輯卷之四十五終

○八犬傳第九輯下帙下編之中書画刊刻工匠目次

出像畫工 柳川重信 

淨書筆工 谷金川

卷之四十一 高谷熊五郎

卷之四十二 全

剖願 卷之四十三 澤金次郎

卷之四十四 全

卷之四十五 高谷熊五郎

○第百七十六回以下第百八十勝回回外剩筆
 首卷全部總目錄八犬士畧傳姓名目次共四卷近日出來

